

下、ごく簡単に述べてみると、

人口；大正9年から昭和45年の間は、両都市とも約4.3倍の増加率を示し、又男女の比率も、0才から14才までは男子が、15才以上は女子が多いことは、両市の共通の性格となっている。そして、これは又、富山県全体に共通する傾向でもある。通勤通学流入流出状況では、両市とも、当然のごとく他市町村からの流入が多く、しかも流入流出地域は、富山市が県全域にわたり、高岡市が県の西部にかたよっていることが特徴的である。

工業；戦前までの工業立地条件として挙げられた、豊富で低廉な電力と労働力が、電力から石油へのエネルギー変化などと共に、大きく変容していつている。現在、富山県の工業は、伸び悩みの時期にあると言える。又、当面の最大目標としては、富山・高岡新産都市設立に伴い建設された富山新港によるところの対岸貿易の推進、石油エネルギーの開発などが考えられる。高岡市においては、その伝統工業（銅器、漆器、捺染）と、それを基盤として発達した近代工業も見逃がせない。

商業；伝統的なものとして、富山市の家庭薬配置業（旧名、売薬業）があるが、最近の富山県の商業の発達全国平均よりも低いなど、全体に、その商業活動はあまり活発とは言えない。高岡市などの商品卸入先が、昔から現在に至るまで、主に大阪方面に多いということは一つの特徴と思われる。

農業；富山県全体として、その性格を一口で言えば、「兼業型米作依存農業」となる。水田率・兼業率・機械化率等の高いのが特徴的である。特に、兼業に関しては、富山県の地理的条件との関連による交通網の発達と、近代工業の発達、更には富山市、高岡市、の都市機能 e t c、との結びつきが強く、従って離農せずして兼業出来ると言える。

この様に、富山市と高岡市は、互いに各々の特色を生かしつつも、一つの経済圏、文化圏、生活圏等を形成していこうとしているがそれはすなわち、富山市、高岡市を、あくまでも別個のものとして

してみなしていくよりも、そこに一つの方向づけがなされて初めて、両市の各々の機能が生かされる、もしくは生かされる部分が多いのではないかと推察される。

## 長野県御牧ヶ原・八重原台地の地理学的考察

— とくに両台地の比較と地域性について —

渡 辺 むつみ

本論文は長野県東部、上田 — 小諸間の千曲川南岸に位置する御牧ヶ原・八重原台地を調査地域

とし、自然環境（主に地形）とこれに規制された人文現象との相互関係からこの地域の地域性をとらえ、さらに地域内での両台地の差異を比較検討することを目的とした。論文構成は次の通りである。

第一章 地域の概説	第四章 農業
第二章 地形	第五章 要約
第三章 人口と集落	

両台地は蓼科火山と浅間・鳥帽子火山群の中間にあり、海拔650～850mの概して平坦度の大きい小起伏面が東-北-西の三方を急崖に囲まれて広がっている。これらは一見蓼科火山の裾野の延長のように見えるが、地質的には蓼科及び鳥帽子火山とのつながりは認められず、第三紀層の基盤の上に本地域に給源をもつであろう火山噴出物と洪積世初期の湖成層がのっている。台地上の小起伏面は景観・地質との対応関係などからみてこれらの侵蝕削削面であり、これを3面に分類し、各々の分布をみると、主に上位の小起伏面Ⅰが台地南部、中位の小起伏面Ⅱが御牧ヶ原台地、下位の小起伏面Ⅲが八重原台地にあって、八重原台地の方が平坦度が大きい。この事実はいく両台地の開発の歴史、土地利用の差などに大きな影響を与えている。

台地地域はほぼ純粋な農業地域であり、農家率は80%をこえ、なかでも農業本業のものが多。本地域は比較的東京に近く、小諸、上田の地方都市の間にながら近代的商品作物をまじえた農業、あるいは近代的産業の発達から取り残されているが、この原因としては急崖による交通の障害が考えられる。この為、台地地域はその内部に近代の産業が未発達の上に他地域との連絡が悪く、現在もお水田、養蚕などを中心とした農業に依存する傾向が顕著であり、人口流出が進み、過疎化が著しい。

ところで、両台地を比較するとこの傾向も各々異なっている。御牧ヶ原台地は周縁をすべて急崖に囲まれる為、他地域との隔絶性が著しく、台地上が1つの孤立した固定的な社会を形成しており、台地内に農業外の産業の発達はほとんどみられない。そこで、御牧ヶ原台地は明治期の農業の開拓は完全に定着したが、まだ他地域との同化が始まっていない地域と思われる。一方、八重原台地は江戸時代初期に開拓されたが、台地を南北に貫く道路があり、近年他地域との連絡が活発になってきた。この結果、社会は流動的になり、農業への依存度は低下して兼業化が進むと共に人口流出が著しく、今日の日本の農業地域一般と共通した傾向を示し始めている。

これらの点からみると、八重原台地の方が、社会的・経済的に御牧ヶ原台地よりいわゆる近代化が進んでいると考えられる。しかし、御牧ヶ原台地の中ではあくまでも農業中心で生きていこうとする新しい傾向もみられ、八重原台地の農業から離れつつある傾向とは好対照を示している。現在

の日本社会の急激な動きの中で、台地地域が純農業地域からいかに変化していくか、その各々の将来は非常に興味深い。

## 山口県新南陽市の工業化

青 木 久美子

日本の戦後の復興はめざましく、工業の面ではエネルギー革命がおこり、石油化学工業は花形産業となった。太平洋ベルト地帯を構成する工業地帯の中心産業である。新南陽市も隣の徳山市とともに周南工業地帯の核として石油化学コンビナートの一端をこなっている。

新南陽市は一昨年市になった人口3万のまちである。昭和10年、おりからの不況で工場誘致にまちぐるみで努力し東洋曹達が進出してきた。農業と漁業のまちが工業化の道を歩みはじめる第一歩であった。当時の東洋曹達は政府の化学工業振興策の一つであるソーダ工業を中心としていた。昭和30年代までにキリンビール（製びん）などが入っただけでまちの変化はあまりない。

南陽の工業を見ると、徳山を切り離して考えることはできない。すなわち、徳山市に海軍燃料廠が建設され、戦後出光興産に跡地が払い下げられたことによってこの地に石油化学コンビナートが出現するのである。東洋曹達では従来のソーダ工業とともに石油化学工業へと拡大をはじめた。東洋曹達系列の企業が続々誕生したのが、昭和35年頃である。昭和39年に出光のエチレン装置が始動しはじめ、ナフサを中心に各企業がパイプで結合し周南石油化学コンビナートが動きはじめた。同年、防府市、柳井市とともに工業整備特別地域に指定されている。

しかし、石油化学工業は、基地産業といわれるように問題点も多い。地元の労働力をあまり要さず海から原料を入れ、海へ製品を出す、地元との関連が少ない産業である。反面大気汚染度が高いなどの弊害をもたらす。南陽では第一に農業への影響が大きい。防長三白といって古来米作りに励んだ地域であるが近年専業農家が急激に減り、第二種兼業農家が増えている。それも、日雇い、零細下請工場などに勤める家が多い。生活自体は向上しているが、収入を得るために共稼ぎをするといった傾向が現われている。農地の宅地への転換、山林化がすすみ、地価は、昭和35年当時と比べると約10倍にもなっている。農業に未練はあるが将来が不安だから、と借家を立てる農家も見られる。

漁業については、海水汚染のために直接被害をこうむっているだけに重大な問題となっている。